

(2017年2月17日講演)

## 7. 「地政学の歴史と理論」

戦略研究学会 編集委員 奥山真司委員

1972年横浜市出身で、同い年には木村拓哉とマツコデラックスがいる。音楽系の専門学校を出て、カナダの大学に進み、イギリスのレディング大学で戦略学のドクターを取った。コリン・グレイという人が指導教官で、著書は3冊、最近は翻訳ばかりやっていて20冊ほどになる。青山学院大学で非常勤講師と、陸・海・空幹部学校で講師をやっている。

「家に帰って奥さんに地政学を簡潔に語れる」というのはジェンダー的に問題なので、その相手が「旦那さん」でも結構だが、「地政学とはこのようなものだ」と皆さんが誰かに簡単に語れるようにするのが、今回の私の発表の狙いである。

大きく3部構成、地政学の位置付けと歴史と理論と応用。少し堅い話になってしまうので、なるべく脱線していきたいなと思っているが、まずパート1の地政学の位置付けから話したいと思う。資料P4の地図はマッキンダーという人が1904年、日露戦争が始まる直前に、ロンドンの地下鉄のセントラル・ラインのリージェントストリート駅の近く、「背広」の語源で有名なサヴィル・ロウの近くで現在は美術学校になっている、当時は王立地理学会が入っていた建物の中の行動で発表したときに使ったものである。ここから地政学が本格的に始まったと言われている。この地図を頭の隅に置いておいてもらって説明をしていく。

まず地政学とは何かということであるが、最近「地政学」という言葉が乱用されているというか、何でも地政学という感じになってきたが、私が2004年に初めて本を書いたときは、まさかこれほど「地政学」という言葉がフィーチャーされると思わなくて、最近では佐藤優氏も『地政学』という本を出されて冷汗が出てくる状況である。

「地政学リスク」という言葉はアラン・グリンスパーンが2002年に公聴会で使った「geopolitical risk」から来ている。彼は言質を取られないために怪しい言葉を使うと言われているが、そのパターンで使ったらしい。つまり人によって定義がバラバラである。これは社会科学の中では致命的な問題である。定義がバラバラというのは社会科学全般に言えることであるが、地政学とはジョセフ・ナイの言葉を援用すれば「愛」と一緒に、皆あるのは分かっているが、定義が分からないというものである。イメージとしてはやはり国家戦略に関係があると言われている。最近では哲学の分野でも研究されて、逆に哲学的にどうなのだと、私から見ると揚げ足取りのような研究もされている(資料P5)。

今は地政学がどのように研究されているかというのと、大きく分けると3つの分野に分かれると思っている。私が学んできた地政学は「古典地政学」(クラシカル・ジオポリティクス)と言われるものである。現実の国家戦略及び企業がどのようにやるのかを考えるのが、

大戦略（グランド・ステラテジー）としての古典地政学である。その一方で、政治地理学はもっと小さなレベルの、たとえば選挙の区割り、ゲリマンダーというのがよく出るが、アメリカの場合下院の選挙は大体50万人にしなければいけないということで区割りを決めたりとかするのを考える。さらには、先ほど言った哲学的な批判地政学（クリティカル・ジオポリティクス）というものがある。これはいわゆる「地政学」とは何も関係なくて、ただひたすら地政学的な思考を批判するための人たちが集まっている。現在「地政学」を研究しているという人たちの9割がここに当てはまると思う。そもそも封じ込めとは何かとか、封じ込めをするところに権力者の意図が潜んでいるとか、非常に哲学的に考察する人がいる。国境はそもそも人の頭の中に作られた概念だとか、そういう話をする人が多いが、私は伝統的な、一番批判されやすい古典地政学をやってきた。そういう意味では、古典地政学というのは戦略研究の一派であり、国家戦略を考える立場である。政治地理学はミクロを研究している。批判地政学というのはミッシェル・フーコーが、地理とはそもそも権力者の意図がそこにあるとか、そういう議論をしている。今日はいわゆる戦略研究の一環であり、古典地政学を中心に話をする（資料 P6）。

地政学研究の位置関係についてであるが、地政学とは戦略研究の中の一派であり、政治学という大きな枠がある。国際関係、国際政治を研究する中にセキュリティ・スタディーズ、安全保障研究がある。その中でより軍事的な、軍事科学が真ん中になると思うが、その周辺にあるというように捉えてもらえればと思う。政治学の中に国際関係論があり、さらにその中に安全保障論、そしてその中にまた戦略研究（ストラテジック・スタディーズ）が存在するという言われるが、さらにその中の一派として古典地政学が研究されているという位置関係になる。だから、研究している人の数もそもそも非常に少ないし、研究者同士はお互いのことを知っているものだが、それ以上に狭いコミュニティーだなと常を感じる（資料 P7）。

資料 P8 の図を私は戦略の7階層と言っているが、意外と日本人は戦略とはどの位置付けなのだという話が結構分からないパターンが多い。私が一番初めに習ったときに、地政学とはどこのレベルで研究されていたかという、戦争をやるときは作戦のレベルを考えるというのが基本であるが、地政学は戦争とあまり関係ないとは言わないが、国家が大きな戦略を考えるときは大戦略のレベルを考えていると見てもらって結構である。しかも、地図を使っていろいろ考える。世界観と大戦略、この2つが地政学で主に研究されてるレベルになる。戦争の場合を考えると、こういう7つのレベルがあり、レベルごとに話が少し違うのだと、この表を一番初めに会ったときに先生にナプキンに書いてもらって、こういう捉え方があるのだと非常に感心した思い出があったので、それ以降、これをいろいろなところで使わせていただいているが、日本人を一くりにしてはいけないのかもしれないが、日本人が得意なのは戦術と技術である。世界最強だと思うが、この上のレベルで話をする人があまりいない。ましてや大戦略は日本の場合語れない。世界観の部分に関して話をする人がいないという現状である。戦略を考えるときには全部をバランスよく話をした

ければいけないが、日本人は戦術の話が多い。自衛隊の人に話を聞いても、戦術部隊であるから、戦略は実は語れないと言われてがっかりすることがある。

階層の考えで言うと、上に行けば行くほどソフトなものになるし、下に行くほどハードで具体的なものになるという傾向がある。地政学は世界観と大戦略のレベルを中心に考えるパターンが多いと思っている。

古典地政学を真面目にやっていると、「おまえはナチスカ」とか言われる。私もイギリスでも言われた。イギリスはリアリズムである。基本的に軍人の視点だと思う。やはり一番厳しいのは、帝国主義とナチスドイツと絡んでいたという過去がある。これ社会科学的には一番やってはいけないというか、一番言われるのだが、決定論 **determinism** であるから、「それで地理の運命が決まっているとは何だ」と突っ込まれる。単純過ぎるという結論に至ってしまうのだが、そういうところで嫌われる部分があるのかなと思う。私自身は、やはり地理というのはどうしても残りそこは引きずるという観点から古典地政学をいまだに研究している部分がある。

反対に古典地政学が生き延びるには「第三の波」にヒントがあると思っている。これは先ごろ亡くなったルビン・トフラーとハイジ・トフラーが、農業革命、産業革命、情報革命があり、70年代からは情報革命の波が来ていると言っているものである。今は第四のネットワークの波だとか、いろいろなことを言う人がいるが、トフラーは、波が一回ずつ来るのだが波自体は残ると言っている。したがって、前の波はそのまま定着して残るのだ。私は自衛隊の人と話をすることが多いが、陸、海、空の3つに宇宙とサイバーという新しい領域が5番目に広がってきていて、陸、海、空だけでは何ともならないと言うが、陸の部分がやはり人間が残っている。領域は広がっているが、その基があった重要性は変わらないというところが、古典地政学がこれからも重視される理由なのかなと思っている。元の次元は残っている。ロバート・シラーという人が最近本を書いたが、エコノミックマンという普通の経済は、合理性で人間が動いているのだというモデルが崩れ始めていて、行動経済学が非常に伸びているが、ナラティブとか期待感（エクスペクテーション）、そういうものが実は経済を動かしているのだと言っている。つまり物語のようなストーリー的なもの、シンボリックなものが重要なのではないかというところがあり、そういう点ではまだ古典地政学のようなナラティブ的なものは生き残るのかなと私は思っている（資料 P10）。

古典地政学には前提が幾つかある。国際関係論をやっている方には嫌われるのだが、リアリズムで悲観論に立つ。非常に戦略的で、しかも、この戦略的というのは、戦時と平時の両方である。平和のときから戦略的に動くというところがある。先ほど言った大戦略のレベル、この辺からまず前提として踏まえて考えてもらいたい。

人類は古代から国的なものを作ってきたので、地政学的な考え方をする。孫子の兵法の中にも第9篇以降、特に11篇に非常に地理的な話が出てくる。敵の敵は味方だという話は、インドのカウティリアという人が2600年前に『実利論』という本で言っている。岩波から『実利論』の本が出ていますが非常に読みづらくて、英語版だとしっかり図が付いていて、

そちらのほうが読みやすい。アリストテレスは『法律』という本の中で都市国家の人口とかその辺の位置関係のようなことを書いている。近代ではカントやモンテスキューが地理と政治の関係について書いているが、近代の地政学の発端はドイツの地理学者たちの活躍である。1850年代ぐらいから盛り上がってきた。結実したのが1871年、普仏戦争である。資料 P13 はドイツ帝国の誕生が実はベルサイユ宮殿の「太陽の間」で行われているという有名な図であるが、パリで砲撃がまだ続いているときにプロイセン王のヴィルヘルムがそこで戴冠式をやって「ドイツ皇帝」となった。隣のライバルの国の王様のいるところで、新しくドイツという帝国が誕生したというとんでもないことをやったわけである。日本で言うと皇居とか迎賓館で朝鮮統一の建国記念式典をやるくらいの衝撃である。実はこのときに普仏戦争に勝ったプロイセン・ドイツが非常に地理を細かく勉強していて、それで勝てたという神話が生まれたが、その伏線が実はアメリカにあったのではないかというのが、自分の研究の中では非常に大きいところである。

私が調べたところではアメリカがドイツに地政学を教えたのではないかという説が結構出てきた。資料 P14 の絵は初期のドイツ地政学者たちがアメリカを観光している様子で、1850年代である。そのころに何が起こっていたかというアメリカでは大陸横断鉄道が伸びていて、モンロー宣言が1823年にあり、その後西方拡大をしていって、1890年時点で既にアメリカはもうフロンティアではなくなったという、フロンティア消滅宣言がなされた。モンロー宣言からたった67年であるから、これは衝撃である。そのころドイツ系の移民がアメリカの中に多かったが、その人たちがそれを見て、自分たちもアメリカと同じようなことをヨーロッパ大陸でできるのではないかという幻想を抱いてしまった。1890年、マハンが『海上権力史論』を書いてシーパワーによる世界覇権の効能を唱えだしたのだが、アメリカの西方拡大にインスピレーションを受けて、ドイツも同じようなことをしようという意識が生まれた。これは後にヒトラーが「自分はアメリカが西に対してやったことを東に対してやっただけだ」という議論をしている。そのときに注目されたのが、大陸横断鉄道という交通革命だ。このインパクトは非常に大きかった。彼らは交通機関だけでなく、その「通り道」の重要性をここで確認したのである。

ラッツェルという人が環境決定論をミュンヘン大学で研究し始めて、その後に、カール・ハウスホーファーという人が日本に2年ほど武官として来日している。日本語もべらべらだったそうである。日本の太平洋拡大やその後の朝鮮半島への拡大、アジアへの拡大を見て影響を受けたハウスホーファーは、1910年にドイツに帰ってから『大日本』という本を書いた。大日本というのはそのまま Dai である。『Dai Nihon』というローマ字つづりの本を書いたのであるが、日本は小さい国だが拡大できたということで、「国境は変えられるのだ」というインスピレーションを受けたようである。その後、先輩となる地理学者のラッツェルから影響を受けて、レーベンスラウムとかアウトタルキー、辺境（これはフロンティアという意味）という概念を取り入れたわけであるが、彼自身のオリジナルの概念はあまりなくて、パン・リジョン、パン・イーデンとドイツ語で言うらしいが、これがハウスホ

一ファーが出した大きなビジョンだと言われている。資料 P15 の地図は世界を縦に 4 分割して考えたものである。世界を南北に縦割りにして管理していけば、世界は安定するのではないかというビジョンを出している。アメリカはまずニューヨークが南北アメリカを支配する。ドイツがヨーロッパの主となり、アフリカや中東まで全部支配する。モスクワにはインドも含めてその南側を全部任せ、東洋は日本にオーストラリアも含めて全部任せる。昔「南北問題」とかよく言われたが、そういう意味での縦割りで世界を管理していこうという思想を彼が出したというのは非常に重要である。

ジョージタウン大学にエドモンド・ウォルシュ外交学院という有名な学部があるが、ここに名を残しているのが、カソリック系のイエズス会の神父であるエドモンド・ウォルシュだ。この人物は先ほどのカール・ハウスホーファーを第 2 次大戦後のニュールンベルグの裁判で訴追するかどうか、直接会ってインタビューしに行っている。この人は帰ってきて、ドイツの考え方は実はロシアの考え方と同じで、大陸の拡大主義は危ないということで、その対抗策をアメリカは考えなければならないと唱えだす。同時期にウォルター・リップマンがアメリカの防衛を唱えているし、セヴァルスキーというエアパワー論で有名な戦略家が北極海が重要だと言っている。アメリカは 1945 年の時点で世界覇権を握ってしまったので、これからどういったビジョンを持つべきか悩み始めたときにたまたま見つけたのがドイツの地政学の考え方だった。その後、ニコラス・スパイクマンという人がいて、私も彼の著作を翻訳したことがあるが、冷戦後のソ連封じ込めのビジョンは実は彼が出していたのだという議論がある。そういったことから、40 年代、50 年代までは地政学の話がたくさん出てきたが、やはりナチスドイツがやっていたという悪いイメージがあり、アメリカが地政学的なことをやらざるを得ない、大きなビジョンで世界を管理することを考えなければいけなかったにもかかわらず、それがアメリカにとってはナチスドイツがやっていたということで、地政学そのものが議論されなくなった。大戦略の議論として地政学という言葉を使いたくないという議論があったが、それを変えたのがヘンリー・キッシンジャーである。1976 年にホワイトハウス・イヤーズ (邦題は『キッシンジャー秘録』シリーズ) という本が出たが、その本の中でキッシンジャーが戦後初めて地政学 (ジオポリティクス) という言葉を使い始めて、「ユダヤ人の彼が使うのだったらタブーじゃないな」ということで地政学という言葉が復活する。アフガニスタンに介入したのが 1979 年である。ミサイルで撃ち合いするから地理など関係ないと思っていたら、アフガニスタン介入に「意外と地理は重要じゃないか」ということで地政学が注目された経緯があり、日本にもそれが波及して亜細亜大学の倉前盛通氏が『悪の地政学』という本を書いたりした。その後は、いわゆる「リアリスト」と言われる国際関係論の学者たちのアメリカの大戦略についての議論に活用されて今に至るが、冷戦後には主に「封じ込め」の次の政策を考えるために、大きく世界を見るためのビジョンが議論されはじめた (資料 P16)。

中国では文明の衝突論が非常にはやっていると聞いた。資料 P17 はハンチントンが 1993 年か 1994 年に発表した地図である。日本の右派の人がこれを見て、日本は 1 つの文明だと

大喜びしたという話があるが、多分ハンチントン日本のことをあまり知らなかったのでは思う。Sinic は中華文明で、Buddhist はタイ周辺である。Hindu 宗教で基本的に分けている。Western Christendom ということで西洋キリストは随分大きい。Muslim があり Sub-Saharan というのはアフリカ以南のブウドゥとかが入っていると思う。こういう形で7つか8つの文明に分かれているという一つのビジョンである。

もう一つ私が注目したいのはトマス・バーネットである。少し怪しいと言われているが、バーネットは「ペンタゴンの新しい地図」という論文を2003年に発表して、その後本にした。日本では『戦争はなぜ必要か』という間の抜けたタイトルになって翻訳されているが、地政学のビジョンとしては面白いものとして注目されている。アメリカが介入したところと介入していないところをマッピングして、介入したところを「ギャップ」と呼んでいる。アメリカはこのギャップのところに随分足を取られていて、それ以外のところには全然介入しておらず、介入していない都会の部分「コア」と言う。つまり、アメリカは世界をグローバル化するために、90年代から彼ら自身も分からずとにかく世界に武力介入してきたというのだ。それを踏まえて、彼は「アメリカの大戦略というのはグローバル化を推し進めるために行ってきたのではないか」というビジョンを2003年に出した。ところが「ギャップ」にシンガポールが入っており、シンガポールは先進国の中に入るのではと批判されている。また、彼はグローバル化を進めるためにイラク戦争に賛成したが、「グローバル化を進める」というビジョンは正しいとして、このような地図を書いた。地政学とは少し別であるが、戦略地図を大きく見て世界をアメリカはどう管理していくのかという考えがここで出てきたのが非常に重要だなと私は思っている。

パート3、地政学の理論と応用。理論は大したものがない。古典地政学の「賢者」ワイズメンと言われている人が3人いるが、批判地政学の人たちに言わせると、3人のstupidな男だと。私もイギリスにいたときによく言われた。ただ、この3人が理論的なものを出しているのは間違いない。一つのビジョンを出しているという感じである。1人目は先ほどから何度も出てくるマハン、海軍士官で、日本にも来たことがある。明治維新の鳥羽伏見の戦いの頃に堺港に停泊していた自分の船（イロコイ号）に最後の将軍である徳川慶喜が乗り込んできて一晩泊めた、ということも経験している。神戸は緑がきれいで素晴らしいところだという言葉を残しているが、海軍士官のくせに船に乗るのが嫌いだったらしい。後にイギリスをベースにして、なぜイギリスは世界覇権できたのか、それは海を握ったからだとして「シーパワー論」を出した。

2人目はハルフォード・マッキンダー。私はレディング大学に行っていたが、レディング大学を創ったのがこの人で、ロンドン・スクール・オブエコノミクス（LSE）という世界的に有名なロンドン大学の分校があるが、その初代のディレクターをやっていたのが、このマッキンダーである。イギリスの地理学者で、政府高官や実務もやった人である。いわゆる「ハートランド理論」、まさに先ほど吉崎主査が言われた「東欧を制する者は世界を制する」という理論を1904年に発表した。

3番目は私が1冊翻訳を出しているニコラス・スパイクマン。「リムランド理論」を1940年代に発表して、今の中国の東シナ海における勃興のようなものを1942年の時点で既に予見していたすごい人である。なぜ予見したのかという話については後で説明したいと思うが、この3人を押さえておけばとりあえず「俺は地政学を知っているぜ」と胸を張って言えそうである(資料P20)。

マハン自身は世界地図を描かなかったが、海軍大学を辞めてから時事評論家になってからは「1900年頃の世界を概観するとこうなる」という大きなビジョンを出している。それがMahan's "Debated and Debatable Middle Strip"という概念に集約されている。資料P22は彼の理論を伝記作家がまとめたものであるが、マハンは1900年の時点で「グレート・ゲーム」が行われていたと言っている。ロシア帝国のパワーが上から落ちてきて、それに対してインドを握っていた大英帝国は、日本も含めてであるから三方向から、ロシア帝国とぶつかって、そのぶつかっているところが「ミドル・ストリップ」という真ん中の帯の部分である。原本を見てもらうと分かると思うが、ここには朝鮮半島まで入っている。アフガニスタンも入っているし、トルコも入っている。こういうビジョンを出していたというのが非常に興味深い(資料P21、22)。

資料P23、24はマッキンダーである。イギリスの立場から見て、真ん中がハートランドで、当時その場所を占めているのはロシア帝国だった。その間の帯の部分がリムランド、そして南北アメリカや日本、それにグレート・ブリテン島などが「沖合の島」になっている。大きく見れば、「沖合の島」がハートランドを囲んでいて、リムランドのところで争いを続けているということになる。1904年に書いた論文では、ハートランドの場所の名前が「ピボット・エリア」となっていた。ヨーロッパの歴史を動かしてきたのは、実はこの「ピボット・エリア」から草原を伝って来る危ない連中だったということを書いている。この脅威については、ロシアの「タタールの軛(くびき)」という言葉が有名だ。したがって、マッキンダーの考え方では、ヨーロッパは半島である。半島がなぜまとまれたのかということ、内陸から来る脅威によってヨーロッパという概念を一応まとめたからだということである。敵がいることによって我々は「ヨーロッパ」という感覚を何となく共有できたという考えを示している。

資料P25はスパイクマンである。このビジョンを出したのは1940年ぐらいだと思うが、基本的に旧大陸にアメリカは囲まれてしまっていて、それに対して新大陸は日本やドイツも脅威に囲まれてしまう脅威があるので逆に地球を回って囲んでしまえと主張した。そうすると南北アメリカ側からハートランドのある側のリムランドが係争地になるのだが、その囲み方はこのようにいろいろパワープロジェクション(戦力投射)のやり方があるだろうという考え方を示す。囲まれるのが嫌だったら、逆に囲んでしまえという考え方を示したのだが、もう一つ有名なのがリムランドである。マッキンダーはハートランドが重要だと言っているが、このリムランドを誰がコントロールするかが世界の運命を決めるのだという議論を打ち立てた。

アメリカにやはり戦略地図があるのではないかとされている。戦略地図を見ていくと、ストラテジック・エリアと言われる、世界三大戦略地域がある。「東アジア」「中東」それと「西欧」である。政権によって中東>西欧>東アジアのように優先順位にばらつきは出るが、「アジアのリバランス」というオバマ政権が出した一つのビジョンは、簡単に言えば「中東と西欧から撤退しつつ、それを東アジアに当てる」というもので、そのためにたとえば西欧からは部隊を師団レベルで引き上げている。そして余剰な戦力を東アジアに全部持っていかうとしていたわけだが、シリアやリビアの戦闘が急に激しくなってしまう、イラクやアフガニスタンも相変わらずなので、中東からの撤退はままならない。また、欧州ではロシアの脅威が台頭してきたために西欧の撤退も無理。そのためにリバランスが崩れたという見方が、アメリカの戦略地図から見ると言える（資料 P26）。

この3人の地政学のベースについて私が論文で書いたときにまとめたものがある。

1 番目。まずビジュアル化する。Visualization 地図を使う。これは経済ビジネスなどでは Visualization、見える化するとよく言うが、地政学では初めから言っている。2 番目が境界化である。Demarcation と呼ぶ。地域ごとにとりあえず分ける。古典地政学の場合はハートランド、リムランド、海という3つに分けることがある。3 番目、交通線である。自衛隊では SLOCs と言うが、海上自衛隊で講義するときには必ず SLOCs と言う。陸上自衛隊と航空自衛隊の方に SLOCs と言うと少し嫌な顔をされるので、あえて交通線というナチュラルな言葉にしているが、実態は海の交通線は非常に重要だと思っている。4 番目、チョークポイント、関所である。箱根の関所がなぜ重要かという話をさせてもらった。映画館の入り口でチケットを渡すところが関所である。インターネットのウェブサイトで課金されることや、Amazon の最後のクリックするところが関所である。関所を誰が握るのが地政学では非常に重要になってくる。5 番目、勢力均衡 Balance of Power。これは力関係である。基地と橋頭堡、Bridgehead と言うが、足掛かりが非常に重要である。なぜ陸上自衛隊は与那国の基地を 160 人ぐらい投入しているのかとか、なぜアメリカは朝鮮半島の烏山とかああいうところに基地を置いているのかとか、スポット的に置いておくのが意外と重要である。地政学は結局勝利を目指しているのだろうと言われるが、違う。コントロールである。優位にたっついていかに管理するかがきわめて重要である。これら7つをベースとして地政学は成り立っていると思う（資料 P27）。

トランプ政権にもし地政学的なものがあるとするならばこういうことなのかというのを挙げしてみた。これはクリストファー・レインという私が翻訳した本の著者がよく言っていて、これは確かにそうだなと思うが、アメリカは実は大戦略は、伝統的に 1940 年代からずっと同じことをやっていると言っている。少し左派的な見方なのかもしれないが、まず第1番目、マーケットの拡大。その次に民主制度の拡大。民主制度と言うが、南アメリカに対して何をやったのかよく見ていると、必ずマーケットの拡大が先に来ているということが言える。中国に対してもまさにこのように言っているのかなと思う。

地政学の原則としては、私は3つか4つあると思っている、アメリカの理想は、実は大

英帝国、これは間違いない。世界覇権をうまくやっていたのは大英帝国で、同じ文化圏ということで見ている。次が島国、シーパワーであるということ。その三が周辺海のアクセスの確保。先ほど言ったユーラシア大陸に足掛かりを作れということである。この3つか4つの原則をアメリカは無意識にやっていると私は思っている（資料 P28）。

資料 P29 はイギリスの理想についてである。地政学ではイギリスを理想としている。なぜか。ヨーロッパの大陸に関してイギリスが 19 世紀に何をやっていたか。世界覇権を握っていたときに、大陸からまとまった脅威が来ないようにヨーロッパを分断するのがイギリスの理想的な考えだった、グランド・ステラテジーの一つだったと見るが、アメリカも同じだと言っている地政学者の人がマッキンダーをはじめ多い。ユーラシア大陸には世界の人口の 60～70% が住んでいて、彼らがまとまってイギリスにこないようにするという意識を非常に持っている。

ロシアの地図を歴史的に見て分かるのが、ロシアは非常に恐怖心が強い。ロシアは基本的に 5 つのルートから今まで侵攻されてきたと彼らは思っている。基本的にロシアの拡大ルートは 5 つの方向に向かうのだが、彼らはそれを取りに行くというよりはむしろ守るために外に拡大するという意識が非常に強いのかなという感じが個人的にしている。つまりロシアは非常に恐怖感を持っているというのが一つ、ロシアの地理を見る上で非常に重要である。私も論文を読んだが、アレクサンドル・ドゥーギンという人がロシア国内で非常に怪しい地政学を広めている。ロシアがまず目指すのはソ連の復活であると言っている。ソ連の復活ができれば、今度はドイツと日本とイランと組んでアメリカを追い出そうという。日本としては非常に迷惑な話だが、これが最終的な彼のビジョンで、これをロシアで実現しなければならないという、非常に民族主義的な説である。ドゥギーは陰謀論たっぴりの人で、世界政府は中国を支援しているが、トランプはその世界政府に対抗している我々の味方である。したがって、トランプと一緒に頑張ってアメリカを追い落とさなければいけないということを主張していて非常に恐ろしい（資料 P30）。

資料 P31 は中国の戦略地図でまさに一帯一路である。ビジョン的には、マハンの考え方からいったら実現できないはずというか、リソース的に無理だが、海と陸の両方を取ることである。

やはり中国を歴史的に見ると、外に出てきたのは明の時代である。鄭和はまさに 7 度航海した。あれ以外で中国のビジョン的になるものが、外に拡大するものがない。中国は基本的にランドパワーというか、10 幾つの国と国境を接しているので、どうしてもそちらに意識が行かざるを得ないが、90 年代にロシアとかなり手打ちをしていて、陸のほうがある程度安定できたので、ようやく海のほうに出てきている。実際経済も沿岸部が盛り上がっているのでここから海に出ていこうという意識が強まっているのは、中国の長い歴史を見てみると、かなり例外的な時期なのではないかと見ることができる。そういう形で、陸と海の両方ともいいところ取りでいこうというのを実現したいと思っているというか、そういうのはうまくいくのか。中国は本当にこういう掛け声を掛ける、看板とかを出すのが非

常に好きであるが、実際実現できるかどうかというのはいつも疑問符になるところがある（資料 P31）。

資料 P32 は南シナ海封鎖についてである。日本の識者の中でも注目されていて、たしか笹川財団のあたりでも研究会をやっていて、私も一回呼ばれたことがあるが、南シナ海が封鎖された事例が戦前にあり、昔の軍部がいろいろ研究していたらしいが、現在もやはりそういう人たちがごく一部にいるようである。石油業界の人たちを集めて、マラッカ海峡が封鎖されたときにロンボク海峡を通すとコストがどのくらい掛かるのかという勉強会を今やっているそうである。確かに可能性としてはなきにしてもあらずで、そういうリスク分析をやろうとしているのは良いことではないかと思う。

今アメリカの地政学の議論で言われているのが、「アジアの地中海」という議論である。アジアの地中海という議論そのものは、スパイクマンが 1942 年に出版した著書の中で「戦争が終わったら日本とドイツと組まなければいけない」と書いている。この本は最近日本でも邦訳が出た（『スパイクマン地政学』）。日本から軍事力が削除されるから、アジア太平洋では恐らくアメリカが太平洋をインドまで握り、中国がそのうち統一を果たして国力を上げ、中国がエアパワーを活用して「アジアの地中海」の覇権を握る。中国が力を伸ばしてきたら、アメリカはそこから撤退する可能性があるということを 1942 年に予言書のような形で書いていたが、その議論が今アメリカの中でも出てきつつある。資料 P33 の右側のイラストは、太いこん棒を持っているセオドア・ルーズベルトであるが、カリブ海というアメリカにとっての地中海を取った後に拡大しているというロジックがあるわけである。このアナロジーを使って中国も、南シナ海という裏庭の周辺海もしくは東シナ海を握った後に世界に拡大するのではないかという恐れを抱いている人たちが戦略を議論する方の中に結構いる。したがって、裏庭をまず握る、その後に世界に拡大する。中国も南シナ海でまず自分の裏庭を確保する、その後に外に出ていくのではないかという議論がされている。ソ連の場合はオホーツク海を聖域化するという話が昔あったが、これを元に「裏庭を握ってから外に出て行く」という意識が非常に今議論されているところで、これも逆に田中委員に聞きたいところであるが。

資料 P34 は BBC のサイトである。我々は面で考えがちであるが、IS でも支配地域は必ず通り道である。確かに領域的にとっているところがあるが、大事なものは線である。どここの線を誰が取るか、その線を誰がコントロールするかというのは、まさにこの IS から見えてくる。もちろん町を取るというのはあるが、その町に至るまでのルートを誰が握るのが非常に重要だと思う。

北極海の地政学も実はルートの話である。ロシアはノースイースタン・ルート（北東航路）を整備している。ヨーロッパのほうから行って、ベーリング海を抜けて日本へ来る。カナダとかアメリカのほうは全然足りてなくて、砕氷船を作る作らないでまだもめている。ロシアは着々と作っていて、いろいろなところに寄港できるようにしているという話がある。これも実はルートを握るということであるが、北極海の地政学にとって何が重要な

かという、地政学にとっては革命的である。なぜかという、地政学では今までハートランド（資料 P24 参照）を通れないことにしていた。それが通れるというのは、運が良いのか悪いのか分からないが、そうすると交通革命が起こる。横浜からオランダに行くのに 30%~40% 距離が縮まる。政治的にも安定的しているし、通りやすいということになったらどうなるのかという意味で、北極海は非常に革命が起こっていると捉えられているが、私は北極海は無理だと思う。通れるか通れないかという事実よりも、むしろスペキュレーションというか、「通れることになる」という期待感のところで動き始めて、逆に国後とかの防衛とかが重要だという方向になっているのかなという感じがする（資料 P35）。

マッキンダーは交通革命による歴史的な変化が過去 3 回起こったと言っている。1000 年ごろ、ランドパワー革命が起こった。馬を使って、1200 年ごろ、日本も被害を受けたが、モンゴルが馬というテクノロジーを使って攻めてきた。1500 年代になると、今度はシーパワー革命が起こって、船がその交通手段として使われた。マッキンダー自身は、この 1900 年にランドパワー革命として大陸間鉄道によって起こったと言っているが、これはどうも怪しいと私は思っていて、いまだに 1500 年の時点で止まっているのかなと私は思っている。飛行機が出てきたと言われるが、世界の貿易を重さの部分で見ると 95% がいまだに海上を伝って運搬されているので、そういう意味ではあまり変化していないのではないかと（資料 P36）。

最後に地理的な話である。資料 P37 の選択肢について、私は 10 年ぐらい変えていない。古典地政学から見えてくる日本の大戦略の選択肢としては、もうこれくらいしかない。日本にも過去に、富国強兵、吉田ドクトリン、東アジア共同体とか、安保ダイヤモンドなどが出てきたが、これらが大戦略だと言われている。日本はヘッジングしているのではないかと、特に 2010 年ごろ民主党政権が出てきたときに、日本は中国とアメリカを両てんびんに掛けているのではないかとアメリカに言われたが、三つの選択の中で 1 のほうに行っているという選択肢は、単純に言えば「シーパワー連合」ということである。2 のほうは、戦前にやって大失敗して、もうこりごりとな「大東亜共栄圏」であり、現状では無理な選択肢である。いまだに右の人たちは「核武装して独立独歩できる」と言うが、それは無理だろう。3 番目の中国従属も難しいだろうという感じがする。

最後にまとめであるが、陸と海という対立構造は変わらない。アメリカは今トランプ政権が無関心なのか撤退なのか微妙なところにある。中国が拡大しているのはある意味一つの余裕の表れなのかなという感じがする。日本はユーラシアの縁でどこまで自分の状況をコントロールできるかであるが、これもなかなか難しいところがある。中東>欧州>東アジアという三大戦略地域の優先順位が変わるかなと思ったが、変わっていない。

資料 P39、40 は地政学の名言である。

参考文献として、私が翻訳したり、監訳したりした本が幾つかあるのでご参照までということでご紹介させていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。